

# 断章 旭川のアイヌ語 地名研究

59

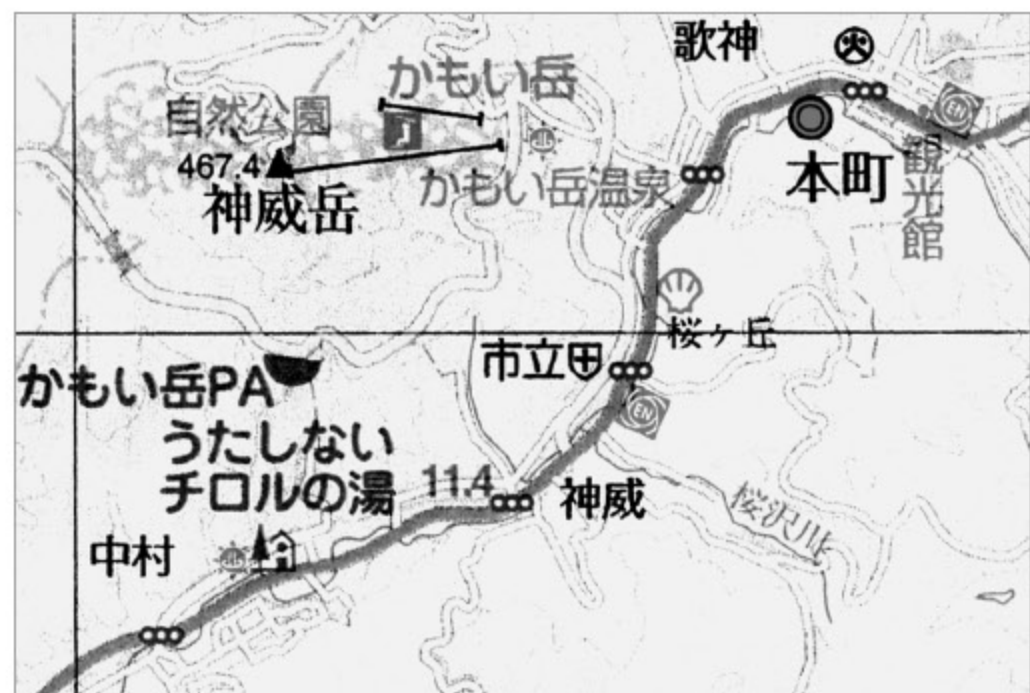
高橋 基

今回は、旭川のカムイコタンの表記は、松浦武四郎のカモイコタン表記から、神居古潭の漢字表記となり、永田方正によって、カムイコタン表記となつて、明治二十三年に神居村が誕生したことを述べた。今回は反対に、カムイがカモイの表記になった歌志内市の場合を紹介する。

今年、旭川市民の誇りである作家・三浦綾子さんの生誕九十年の記念の年である。三浦綾子さんは、「一九三九年（昭和十四年）、私は市立旭川高等女学校を卒業、小学校教諭の検定試験を受けて、その年から歌志内の神威小学校に赴任した」（原文のまま）『ひかりと愛といのち』平成十年十二月、岩波書店刊。また、「わたしの住んでいた神威の市街地にある家の二階から、真向いに神威岳が見えた」

（前書）という。

実は、三浦綾子さんがわずか十六歳十一月の若さで、最初に赴任した歌志内の神威小学校は、「かむい」の読み方では



歌志内市一道路地図

み方ではなく、「かむい」が正しい読み方であった。冒頭の文章は、随筆

ている。また、歌志内市のホームページでも、難読地名の読み方として、「神威IIかむい」と掲載している。

もう一つ、歌志内市の神威のエピソードを紹介しておこう。歌志内村は、昭和十五年四月一日から町制が施行された。その時点で公的には十八の字名のほか、土地台帳には、全部で約四十の字名があったといわれていた。複雑で事務上も支障が出るので、北海道庁に字名改正と地番整理を申請した。これを受けて、昭和十六年三月十三日、北海道庁告示第三百九号で、九つ

## 旭川のカムイコタン⑬

集『ひかりと愛といのち』の巻頭の『氷点』の最初の文章で、初出の『女性自身』の昭和四十一年四月十八日号の「私はなぜ『氷点』を書いたか？」や、自伝小説の『石ころのうた』では、正しく「神威小学校」とルビが付されている。「かむい」は、正確無比を誇る岩波書店の珍しい誤植である。

の字名が告示された。「神威」もその一つで、「カムイ」とルビが付されていた。しかし、前述のように、現在まで、歌志内市では公的に「カモイ」の読み方のままで、北海道庁告示の「読み方」が守られなかった珍しい例である。

「中でも、汽車の左眼下に蛇行する神居古潭を見た時は、この世にこんな綺麗な景色もあつたのかと、姉にいくら突っつかれても、「わあ！きれいだあ！」「大きな石だあ！」と、つい叫んでしまうのだった。子供の私は、碧水という言葉は知らなかった。白い沫という言葉も知らなかった。澄んだ水がある場所では碧く、ある場所では煮え滾る湯のように岩を噛み、またある所では緑色の水羊羹のように静まりかえった深い淵を見せていた。ここが神居古潭と呼ばれる景勝地であることを、私は初めて知った。」（主婦の友社『三浦綾子全集第十二巻』所収『草のうた』）

歌志内市のシンボルの神威岳（四六七）のスキー場や温泉などは、誤読を避ける意味も込めて、掲載道路地図のように「かむい岳」と仮名書きにし

さて、三浦綾子さんのこれ



神居大橋と旧神居古潭駅

※毎月第1週号に掲載します